

第2章 銃後

札幌空襲

アメリカ軍が札幌へ！

たかはしせいいち
高橋清一さんのお話から

昭和十八（一九四三）年ごろ、一番大変だったのは、食料でした。私は当時、小学校一年生です。詳しいことは分からないのですけれども、とにかく食べるものがなく、皆さん大変に苦しまれたと思います。お米はもちろんですが、じゃが芋なども不足していました。もちろん戦争をしていますから、だんだんと戦況が悪くなってきたこともあるのですが、国民にとつてみれば、その日、食べるものも満足にないということが一番辛かったのではないのでしょうか。

私の家は農家でしたが、とれたお米は、自分のところで食べる自家保有米を除いて供出していました。政府がお米を買い上げて、兵隊の食料を賄っていたのです。農家以外の方は食べるものにもっとも困っていました。さらに昭和二十（一九四五）年は凶作になり、この年はお米が不足していました。生産量そのものが少なかったのです。お米の代わりだったじゃが芋も満足に食べられませんでした。私は農家だったのでほかの皆さんよりは多少よかったです。思いますが、それでも食べるものが少なくて、口に入るものがあれば何でも良いという状況でした。たえずお腹がすいていました。

北海道にもアメリカの飛行機が空襲に来ました。昭和二十年ごろからは夜になると、窓に黒い紙を張って、電気の光が外に漏れないようにしました。飛行機の目印にされないようにするということです。また、空襲に備えて、皆、各家庭で防空壕をつくっていました。

実際に昭和二十年七月十四、十五日にアメリカの飛行機が北海道に来ています。室蘭もやら

○防空壕 航空機による
空からの攻撃から身を守る

るためにつくった穴や地下室。

れましたし、札幌も攻撃されました。厚別で私が体験したのは日中の時間帯でした。たまたま飛行機が来たと思つて、手を挙げて飛行機の方を見たら、突然急降下してきたのです。私は慌てて防空壕に飛び込みました。そのときは、函館本線を走っている機関車をねらつて撃つたのです。客車ではなくて機関車です。そのとき私の父親は、函館本線に近いところの田んぼにたまたまいたのですが慌てて木の下に隠れたと聞きました。やはり、北海道にも被害があったのです。

物資がとにかく不足していましたので、私たちは春先に野幌原始林の方へ行き、イタヤカエデの幹を傷つけるのです。そして、その傷のところを鉄板を刺して、桶にするのです。そこから出る樹液がすごく甘いのです。これを一升瓶にとつて、学校に出しました。これも供出と言つたのです。当時は、近所の生徒と競つて一緒に供出しました。

私の家には当時、農家としては珍しくラジオがありました。それから、新聞もとつていましたので、戦争の状況がある程度分かるような環境でした。私も自分で結構関心を持っていたので、戦況は気にしていました。戦況



機関車を攻撃する戦闘機

イメージ図

アメリカ軍が札幌へ！

○大本營 戦時または事
変の際に、天皇に直属し
て陸海軍を統帥した最高
機関。

○玉音放送 天皇自身の
肉声によるラジオ放送。
特に終戦を伝えるラジオ
放送を指すことが多い。

は、大本營が発表しましたが、実際には事実と違った発表をしていました。ただ、だんだんと日本軍は後退して、本土に迫られているという状況だけはラジオや新聞で伝わってきました。私の家は国道に面していて、日本軍が時々訓練へ通って行きました。そのときにつかりしたのは、終戦間近に走っていたトラックが木製だったことです。木製ですが走るのです。物資がなくて、炭をたいて走っていたのです。だから、動いてはいたのでしょうけれども、能力的には非常に劣って、戦闘能力は本当にひどかったのではないかと思います。

玉音放送は、自宅で聞きました。前日からラジオ放送が止まっています、おかしいなとは思っていたのですが、八月十五日の午前中に突然ラジオが鳴り出しまして、正午から玉音放送がありますという放送があったのです。玉音放送というのは雲のような存在の天皇陛下の生の言葉ですから、まさか終戦の際に聞くとは思いませんでした。

そのときはこれで終わったのだなど実感しました。ただ、あまり残念だという気持ちはなかったような気がします。その前からだんだん戦況が悪くなっていて、国民の生活がひ



イメージ図

進駐してきたアメリカ軍

○進駐 軍隊が他国の領土に進軍し、とどまっていること。

どい状態だということは子どもなりににも分かりましたから。やむを得ないというか、仕方ないかという気持ちだったと思います。少しほっとするような気持ちもあったかもしれません。周りを見ても悔しいというような反応はなかったような記憶があります。みんな生活そのものに疲れていたのだと思います。

終戦後、一番大きい変化は、アメリカ軍が進駐してきたことです。札幌にも入ってきました。ある日、小樽に上陸して札幌に来た進駐軍が、翌日国道を通過して旭川に行くという連絡が警察からありました。私は国道が通学路でしたが、当日は休んでいいということで学校に行きませんでした。旭川に向かう米軍が武装したまま来て、その装備を見たときに、以前に見た日本製の自動車との差が余りに大きくなって本当にびっくりしました。装備が全然違うのです。これでは勝てないのは当たり前だなど、そのときにつくづく思いました。

これからの若い皆さんには、留学などをどんどんして国際化というか、視野を広げて欲しいと思います。そうやって学んだことを自分たちの国の繁栄に生かすという心がけで勉強してほしいと思います。そうすると、物事の判断のときに、狭い見方ではなくて、広い見方でいろいろなことが判断できると思います。何も国会議員にならなくても、民間の会社に勤めても同じだと思います。そういう人がたくさん出てくれるといいと思います。

DATA

平成22年度厚別区平和事業
聞き取り

- ・平成22年6月14日
- ・厚別区役所



高橋清一(たかはし・せいいち)さん

- ・昭和12(1937)年生まれ
- ・札幌市厚別区在住